

平成31年3月20日
秋田県校長協会「会報」

秋田県立本荘高等学校 校長 今井 智幸

「共育」と「育自」

「子育てのなかでは、誰もが多かれ少なかれ不安やストレスを感じる。これらを乗り越えていくことを通して、親もまた子どもと共に成長する。育児とは『育自』であるともいえる。」

これは、本校の家庭科で使用している教科書「家庭基礎」（開隆堂）の「第1部 人生を見通し、共に生きる」「第2章 子どもの発達と保育」の中の「2 子どもの育つ環境 ①親の役割って何だろう？」からの抜粋である。

もちろん、私の子育ての話ではなく、これまでの私の教師生活の思いからの引用である。教科指導、学級経営、部活動と、赴任した学校の生徒たちとの思い出は、これからも私の人生に様々な彩りや陰影を与えてくれる貴重な財産となるであろう。

最初にクラスを受け持った生徒たちは、既に職場でも大きな責任を引き受け、頼りとなる戦力となって活躍している年齢である。今でも、それぞれの学校での、当時の生徒の時々姿が懐かしく思い出される。回り道をして教師となった私は、学級担任へのあこがれが強かった。講師を経験した学校では、力のある教師が学級担任を任せられていたので、なおさら学級担任をやってみたい、できるだけ長く学級担任をやり続けたいという思いが強かった。五十二歳まで学級担任をできたのは、本当に幸せな教師生活だったと思える。

教科指導、部活動指導でも、少しでも近づきたと思える目標となる先輩教師に恵まれた世代である。いや、年齢にかかわらず私の教師生活に彩りと陰影を与えてくれた様々な出会いに感謝したい。私の人生にも彩りと陰影を与えてくれたのだから。

陰影とは、深く味わって初めて分かる、含みと変化。（三省堂）今になって分かることがある。何事にもその時々で向き合ってきたつもりではあるが、あの時もっと広い視野で、もっと深い専門性で、ああしていればこうしてやっていたら生徒がもっと伸びたのではないか、成長できたのではないかと、ふと思うことがある。その思いは、残り少なくなった私の今の教育活動を支えてくれる。過去の思い出は、懐かしく楽しかったものになりがちではあるが。

私が、教師として、人間として少しでも成長できたとすれば、それはこれまでの教師生活を通して出会えた生徒、先生方、保護者、地域の方々との出会いによるところが大きい。もし自分の拙さや壁を少しでも乗り越えられたとすれば、多くの方々に支えられたおかげである。人生を見通して生きてきたわけでは全くないが、私にとって教師生活が生徒と共に育つことができた「共育」であったことに感謝したい。